

# 主体的な活動を促し豊かな表現力を引き出す 芸術（音楽）の授業づくり

— デイサービスセンターとの交流を通して —

坂野 敦子<sup>1</sup>

高等学校芸術科においては「豊かな情操を養う」ことが総括的な目標として掲げられている。この目標の実現に向け、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるために創造的な表現に焦点を当てた。本研究では、敷地内に併設されているデイサービスセンターの利用者の方との交流を通じた学習活動を設定し、聴き手を意識した創造的な音楽表現に取り組むことで「音楽への関心・意欲・態度」及び「音楽表現の創意工夫」の変容について検証した。

## はじめに

本校は、全国でも珍しい、敷地内にデイサービスセンターが併設された学校である。普通科一般コースの他に福祉教養コースが設置されており、学校全体で福祉教育に力を入れている。音楽科の授業では、毎年、デイサービスセンターで演奏会を行っており、利用者や職員に喜ばれている。しかし、その内容は学習成果を発表するものに過ぎず、ボランティア活動の延長でしかない。生徒は発表を聴いてもらい、喜んでもらえるという充実感は味あえるが、聴き手のことを生徒自身が考えることはなかったため、取組が教師主導になっているという課題があった。また、芸術科の目標である「豊かな情操を養う」ことにつながる「創造的な音楽表現」の指導についても、通常授業の中では動機付けが難しく、学習指導の充実の面で課題を感じていた。

そこで、この2点に着目し、学習の動機付けとしてデイサービスセンターとの交流を価値付けることはできないかと考えた。つまり、「聴き手」として利用者を意識することで、生徒自身がどのような発表をすべきかを主体的に考え、発表における音楽表現の工夫に自発的に取り組むような学習活動が考えられるのではないかということである。そこで、学校の特色をいかした取組を学習指導の充実に結び付けることが可能であると考え、本研究に取り組むこととした。

## 研究の内容

### 1 研究の背景

高等学校学習指導要領（平成21年3月）芸術音楽I「目標」には「音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高

1 綾瀬西高等学校

研究分野（授業改善推進研究 音楽）

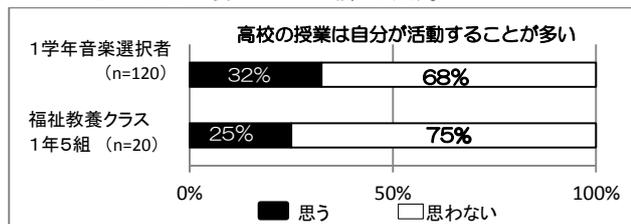
め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深める。」と示されている。この目標にある「創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばす」ことについて、高等学校学習指導要領解説芸術（音楽）編（平成21年12月以下「解説書」と表記）には「生涯にわたって豊かな音楽活動ができるための基になる能力を育てること」と記述されている。豊かな音楽活動ができるための基になる能力の具体的な内容については、解説書においての「内容」A表現の中に「表現したい音楽のイメージを膨らませながら、思いや意図をもって演奏することを重視」との記述がある。これらの記述を総合すると、教科の目標達成の手立ての一つとして、「表現したい音楽について生徒が主体的に考えることが求められている」と解釈することができる。

これまでの筆者の学習指導において、教材としての楽曲に対する理解を促すことや、表現することは一定の成果があったが、生徒自身が選曲し、自らが表現しようとする楽曲に対して「思いや意図をもつ」ことは困難であった。そこで、「デイサービスセンター利用者との交流」という仕掛けを作り、その学習の過程で生徒が意思を持って楽曲を選び、意思を持って表現方法を考え、意思を持って自らの表現の能力を高めようとする態度を形成する授業づくりについて研究を進めた。人生経験豊富な利用者には、少なからず「思い出の音楽」や「忘れられない思い出」が存在する。こうした利用者との触れ合いを通じて、従来の指導では感じ取らせにくい「人びとの心の支えとなっている音楽の存在」や「心を動かす音楽の力」に気付かせる貴重な経験が出来るのではないかと考えた。

事前調査を、本校生徒1学年音楽選択者120名と交流を実施している綾瀬西デイサービスセンター職員10名に対して行った。

生徒対象では、学校生活全般についての実態を調査した。その中で「高校の授業は自分が活動することが多いか。」という質問に対し、1学年音楽選択者全体の

68%、検証授業を実施する福祉教養クラスの75%の生徒が「思わない」と回答した。つまり生徒の多くが、高校の授業において自ら進んで活動している実感を持っていないことが分かった（第1図）。



第1図 生徒対象事前調査結果（抜粋）

また、デイサービスセンター職員に対して、利用者の音楽環境についての調査を含む、本校生徒との交流についての意見聴取を行った（第1表）。唱歌や童謡等が認知症の方との意思疎通の架け橋になる等、利用者にとって音楽の存在がいかに大きいかを再確認できた。

第1表 センター職員対象事前調査記述結果

デイサービスセンター利用者に音楽活動がもたらす効果（抜粋）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体訓練のBGMとして非常に効果がある。</li> <li>・生演奏を聴くこと、歌等で参加することも利用者の方にとっては非常に良い刺激になる。</li> <li>・唱歌や童謡は認知症の方も覚えていたことが多く、効果的に使用されている。</li> </ul>
綾瀬西高校生との交流で喜ばれているもの
<b>演奏会・発表会</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・普段歌わない人も知っている曲だと楽しんでいる。</li> <li>・演奏している様子が微笑ましい。</li> </ul> <b>七夕会・文化祭・クリスマス会における演奏活動</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が来てくれるだけでも喜ばれる。</li> <li>・生徒と触れ合うことで若い力がもらえる。</li> </ul> <b>ランチ交流</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆっくり話ができる。</li> <li>・生徒と利用者さんとの距離が近く普通に楽しく会話ができる。</li> </ul>

そして、「綾瀬西高校との交流を、今後さらに発展させるために考えられることは」という問いには「十分なコミュニケーションを取りながら、生徒主体の音楽活動を期待している」との回答が得られた。

## 2 研究の目的及びその方向性～本校の特色をいかした音楽科の学習プログラムの構築～

前述した背景を基に本研究では以下の目的を掲げた。

### (1) 題材設定

本校では、音楽の授業が2年間にわたって展開される。音楽の学習目標を達成するために、第1学年の段階で基礎的な技能や表現を身に付けていくための土台づくりを進める。そこで、題材として、デイサービスセンター利用者に対する楽曲の発表を「聴く人の心に残る音楽を目指して表現の工夫をしよう～デイサービスセンターとの交流を通して～」と設定した。

### (2) 教材の開発

学習の過程においては、利用者との交流を通じて得た内容を主体的に捉え、その内容を分析して表現方法を考えるという「言語活動」が含まれている。この言語活動を適切かつ円滑に進めるためには、生徒の思考

の過程や、生徒の気づきを記録していく必要があると考えた。このような活動においては、「思考・判断」の可視化が不可欠であるため、ワークシートを開発する。

### (3) 評価について

解説書の音楽Iの3内容A表現には、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して演奏すること」と述べられている。ここで述べられた「音楽を形づくっている要素（以下、音楽の諸要素と表記）の知覚と感受」はA表現とB鑑賞に共通に位置付けられており、音楽表現におけるポイントの一つである。そこで、生徒の活動において、音楽の諸要素がどれだけ意識されているかを記録し、それをもとに音楽表現が適切に行われているかどうかを判断した。

また、中村、尾崎(2012)は、学習における「思考・判断・表現」や「態度」の変容を評価する手法として、学習前後に同一の内容について記述させ、その記述を「量的変化」「質的变化」「情意面の変化」に分類することによって目指す能力に迫る力が形成されたかどうかを判断する方法を述べている。本研究実践の検証においては、この研究内容に基づく評価を基本に、能力や態度の育成の状況を判断した。

## 3 研究の手立て

### (1) 教材の精選

本研究は、「聴き手を意識する」ことを重視するため、交流において選曲そのものが重要である。デイサービスセンター職員に対する意見聴取の中から得られた「認知症の方にとって唱歌や童謡がコミュニケーションの架け橋となる」ことや「知っている歌と一緒に歌う等、利用者が参加する取組がよい刺激になる」ことをもとに、親子で長く歌い継いでほしい童謡・唱歌や歌謡曲より選定した「日本の歌百選」から、生徒が発表曲を選ぶ活動を行った。この教材は、小曲で取り組みやすい楽曲が多く、表現を工夫することに意識が集中できるという利点がある。(②創意工夫)

### (2) グループ活動の工夫

今回の実践においては少人数のグループを活動の母体とした。交流授業やグループでの話し合いにおける言語活動、それをいかした練習への取組、発表に向けての表現の工夫等、合意形成の取組では個人がグループに関わる場面を多くする必要がある。生徒達が自ら気づき、考え、それをいかそうと、こだわりを持って表現の工夫をする活動を促すことで、生徒は自らが主体的に活動に参加したという実感を持つようになると考えられる。(①関・意・態②創意工夫)

### (3) ワークシート等の開発

交流の中で、個人が気付いた音楽表現にいかすことのできる内容や、練習中に技能面での表現の工夫で気付いたこと等を記録し、グループでの活動に役立てるためにワークシートを開発した。

ア 個人用Ⅰ：表現の工夫を記入させる。音楽の諸要素の理解や楽曲の表現の工夫に役立てるために、楽譜と共に活用させた。(②創意工夫③技能)

イ 個人用Ⅱ：初発・終末の感想記入用、毎時間の振り返り用と3段階で記入させた。(①関・意・態)

ウ グループ用：交流活動での内容をグループとして一つにまとめ、表現の工夫にいかすために記入させた。

(①関・意・態②創意工夫)

エ 楽譜の有効活用：曲想に関することや奏法の工夫等を記号や言葉で楽譜に書き込み、音楽表現にいかすために記入させた。(①関・意・態②創意工夫)

#### (4) 表現の工夫を重視した演奏会

歌唱では発声・言葉の発音・姿勢や身体の使い方・呼吸法、器楽では楽器の音色や奏法の特徴をいかした音楽表現に着目した評価に配慮した。楽曲にふさわしい音楽的特徴や創意工夫をいかした音楽表現に必要な技能を個人で身に付けさせた。次に、グループで、聴く側との共演等も考慮した上で音楽の諸要素を用いて表現し、演奏させた。(③技能)

### 4 検証授業

#### (1) 検証授業の概要

検証授業を実施するにあたり、2時間連続の授業形態であること、第1学年の中で比較的デイサービスセンターでの交流経験が多い普通科福祉教養コースの音楽選択者を対象と定め、検証授業を行った。

実施期間：平成26年9月29日～11月17日

対象生徒：第1学年5組(20名)

授業時数：9時間(6日)

題材(単元)名：「聴く人の心に残る音楽を目指して表現の工夫をしよう～デイサービスセンターとの交流を通して～」

教材名：MOUSA1(教育芸術社・音楽Ⅰ)

「日本の歌百選」

#### (2) 検証授業の展開

ここでは授業の流れにそって、グループ活動における生徒の思考の変容を中心とした記述をする。また、以下において、生徒の能力や態度が形成されていく過程の評価の指標として、学習活動において知覚・感受した音楽の諸要素について□で記載する。

#### 第1次【楽曲理解への関心を高め、音楽の諸要素を知覚・感受する】第1・2時

- ・題材についての理解
- ・「故郷」を活用した楽曲理解に対するアプローチ  
音楽の諸要素の知覚(伴奏の変化等によるリズム速度 フレーズ)の学習  
手話による歌詞の文語表現の理解
- ・聴き手を意識した楽曲表現につなげるための「発表曲」の選曲と、交流授業における利用者と話題にする内容の精選

#### 第2次【交流授業により楽曲理解の深め、諸要素を意識した表現の工夫をする】第3～6時

- ・手話と歌唱による「故郷」を教材としての利用者とのコミュニケーション
- ・発表曲の表現の工夫につながる利用者との交流
- ・話題となった内容のまとめと楽曲の表現方法についての話し合い

〈グループ活動の概要〉

A班：「翼をください」を選曲。利用者に歌詞のイメージが暗いと言われ、音色(おんしょく)を工夫して明るく前向きに表現できないか楽器編成について話し合った。

B班：「ちいさい秋みつけた」を選曲。利用者に秋の思い出や歌詞等について聞き、二部合唱のハーモニーによる歌唱を引き立たせたいと意識して表現にいかそうと取り組み始めた。

C班：「雪」を選曲。発表時期の季節感を考え、利用者と一緒に冬について話し合い、音色で雪らしさを表現するためにミュージックベルを使用することを決めた。

D班：「幸せなら手をたたこう」を選曲。利用者と一緒に楽しむことを考え、一緒に歌うためには、音域が高すぎることに気づき、調を変えることを思い付き、練習を始めた。

#### 第3次【中間発表会に対する相互評価及び交流授業による音楽表現の工夫を再考する】第7・8時

- ・交流授業における楽曲の最終仕上げ
- ・意図した表現ができていないかどうかの自己評価と改善に向けての音楽表現の工夫
- ・中間発表における相互評価から、楽曲の表現方法の再考
- ・発表のコンセプトについての全体での意見交換、役割分担や発表順番の決定

〈グループ活動の概要〉

A班：音色の工夫のため、ウクレレ・リコーダー・キーボードを使い、展開部から速度を速めることで、明るく聴こえるのではないかと練習を進めた。

B班：発表会では、まず、自分達の表現の成果として合唱を聴かせ、その後、模造紙に大きく書いた歌詞を見ながら利用者と一緒に全員で歌う構成を考えた。二部合唱の練習を進め、強弱やrit.等にも意識を向けた。

C班：利用者がミュージックベルを持ち演奏する際に、タイミングが合うように遅い速度設定とし、共演する利用者が演奏しやすいように、鳴らす時には合図を出す等の配慮をすることも考えた。

D班：利用者呼びかけ、ハーモニカ・カスタネット・鈴で共演することを決めた。ゆっくりとはっきり演奏することを心掛ければ、一緒に歌も歌いやすくなることに気づき、速度の工夫に取り組んだ。

#### 第4次【交流発表会】第9時

- ・コンセプト「はじめはしつとりと、最後は明るい雰

囲気で締めくくろう」

全員「故郷」：落ち着いた**速度**で、**旋律**の言葉を大切に  
にして手話と歌で発表した。

A班「翼をください」：ウクレレ・リコーダー・キー  
ボードの**音色**や奏法の特徴をいかし、表現を工夫した  
ことに加え、展開部からタンバリンが躍動感のある**リ  
ズム**に変化し、**速度**も速め、活気のある明るい雰  
囲気に仕上げた。

B班「ちいさい秋みつけた」：歌詞を大切に、**ハー  
モニー**にこだわり二部合唱とし、ピアノ伴奏と合わせ  
て**フレーズ**、**強弱**、**速度**で曲想を表現した。

C班「雪」：ミュージックベルにより**音色**で雪の雰  
囲気を表現した。また、遅い**速度**設定にして、利用者  
と共演した。

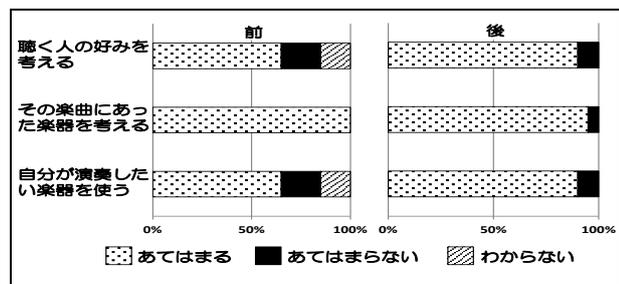
D班「幸せなら手をたたこう」：聴いても見ても楽し  
めるようにカスターネット・タンバリン・鈴の他にパフ  
ォーマンスを入れて**リズム**を体全体で表現した。共演  
する利用者を考え、**調**をへ長調からイ長調に下げ、演  
奏しやすいうちにゆっくりとした**速度**を心掛けた。

各グループ、それぞれが聴く側との交流を考えて工  
夫し、最後はその場にいる全員が手拍子をする場面も  
あり、一体感を感じることができた。

## 5 検証結果と考察

### (1) 聴き手を意識した音楽表現の工夫について

検証授業の前後で当該クラスの生徒に対してアンケ  
ート調査を実施し、音楽表現の工夫に対する意識の変  
容について比較した。大きな変化が見られたのは表現  
手段の選択についての項目である（第2図）。

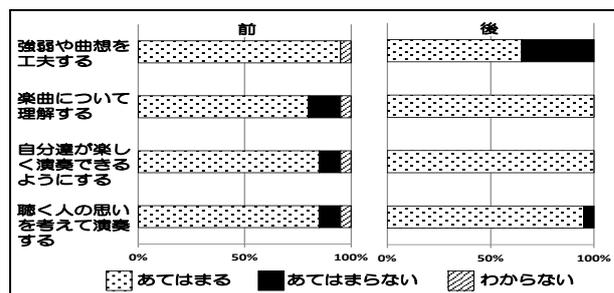


第2図 楽器編成について (n=20)

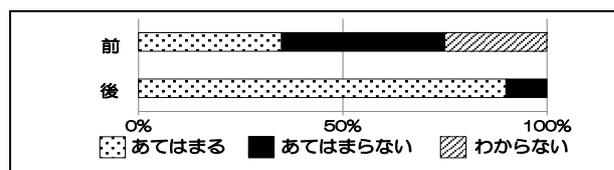
授業前には、聴き手の好みに合わせて演奏すること  
よりも、演奏者が楽曲に合った編成で演奏する方が効  
果的であるとの回答が多数を占めていた。しかし、授  
業後は、聴く人をはっきりと意識して表現することに  
肯定的な印象を抱いた生徒が増加した。

また、音楽表現の工夫についての質問項目では、音  
楽の諸要素を意識しながら、聴き手を意識した表現の  
工夫、楽曲の理解や生徒自身が楽しく演奏することの  
有効性が実感されている。その一方で、強弱や曲想に  
対する工夫の有効性が実感できていないことが明らか  
になった（第3図）。これは、利用者の特性から、**強  
弱**に関する表現においては「強いはっきりした音」が

好まれるというところから得られた実感であると推察  
できる。こうした特殊な部分を除けば、総体的には、  
聴き手を意識した音楽表現の工夫の重要性が認識され  
ていると考えられる。



第3図 練習について (n=20)



第4図 達成感について (n=20)

また、「人前で発表することで達成感を味わったこと  
があるか」という質問項目では、「ある」と回答した生  
徒は、授業前は30%であったのに対し、授業後は90%  
となった（第4図）。今回の交流授業を組み込んだ授業  
展開を通して、演奏者と聴き手が思いを共有するとい  
う貴重な体験となり、「生涯にわたり音楽を愛好する心  
情」につながる感動を味わうことができたのではない  
かと考えられる。

### (2) 音楽表現の工夫と音楽の諸要素の理解

生徒にとって音楽表現を工夫するということが授業  
の前後でどのように変化したか見取るため、授業の初  
発と終末において「表現を工夫する」ことについて思  
いついたことや気付いたことを記入するワークシート  
によりその変容を分析した（第2表）。

第2表 「表現を工夫する」ことについての生徒の授  
業初発と終末の記述式ワークシートより

生徒A	
初発	・強弱を意識する ・音の高さ・音程？
終末	・強弱を意識する・音程など ・リズムを途中おくらせる。 ・強弱を意識して、歌ったことにより、音がふくらんだ 気がしました。だんだん強くなったりするところ。
生徒B	
初発	・歌うときの表情 ・楽器の演奏のしかた
終末	・歌うときの表情→音色がかわった ・強弱をつける→歌いやすくなった ・歌とピアノにした→ハーモニーをきいてもらえた。

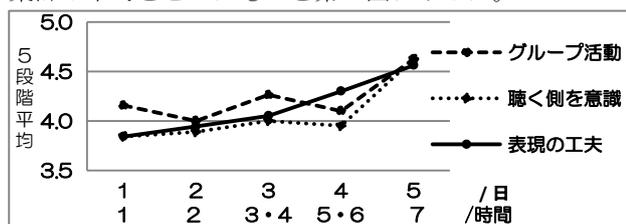
その結果として、生徒が音楽の諸要素を意識して表  
現を工夫することができるようになった記述が見られ  
た。例えば、生徒Aの初発の記述では、とりあえず知  
っている言葉を記入し、何を書いたらよいか戸惑っ  
ている様子が見られるが、終末では、内容が具体的に

なり、取組を通じて自分が感じたことを自分なりに表現しようとする記述に変容している。生徒Bも同様で、初発では「表情」「演奏の仕方」といったぼんやりとした表現にとどまっていたが、終末では「音色」「強弱」「ハーモニー」といった音楽の諸要素に関する用語を用い、その諸要素を工夫する手段について具体的な記述が見られた。以上のような見取りから、音楽表現の目的を明確にした学習活動を組み立て、その活動の中で音楽の諸要素を知覚・感受するような場面を設定することによって、生徒の音楽表現の工夫の手段は具体性を持つようになる。

また、表現内容や利用者との共演の工夫等を楽譜に記述することが、進捗状況の把握やグループでの共有に有効的にはたらき、音楽の諸要素をいかした練習を積み重ねていくことができた。視奏する習慣が身に付いた生徒もおり、演奏時に留意する箇所に意識が向き、表現の工夫を視覚的に助言し、見取ることができた。

### (3) 学習活動に対する主体性の変容

毎時間の授業の振り返りとして、3項目（①グループの中で意欲的に取り組めた②聴く側を意識した積極的な活動ができた③表現を工夫することの大切さを理解した）の達成度を5段階で自己評価させた。得点を集計し平均をとったものを第4図に示した。



第4図 毎時間の振り返りシートによる学習活動の達成度の変容 (n=20)

グループ活動や聴く側を意識した活動では、初めての交流授業（3日目・3時間目）をきっかけに、主体的に捉えた生徒が増えている。学習活動の方向性が見えたことで意欲が高まり、積極的な取組になったと考えられる。そして生徒の記述からも、授業を重ねるたびに表現によって楽曲が大きく変化することを感じ取り、表現の工夫の大切さに気付いた。発表直前の授業（5日目・7時間目）では、3項目すべてが4.5ポイントを超えていることから、グループで積極的に意見を出し合い、聴く側の存在を意識した活動への意欲が非常に高まったと考えられる。

### (4) 音楽表現の技能の変容

#### ア 観察

中間発表会以降、本番に向けて意識が高まり、表現の工夫を深める等、各グループの練習に対する取組に変化が見られた。グループ合奏をより良いものにさせようと、「旋律」と伴奏のバランスを考える等、意欲的に練習をし、基本的な奏法を身に付けていった。また、ワークシートでは「強弱をつけると歌いやすくなった」

（第2表・生徒B）と簡潔に記載されていたが、観察の中では、「強弱」をつけることで、曲想を歌詞の内容や楽曲の背景と関わらせて感じ取り、イメージを持って歌うことができたため、歌いやすくなったと実感したと見取ることができた。

#### イ 演奏

中間発表会と交流発表会における演奏を比較したところ、読譜、呼吸法、奏法等、基本的な演奏技能の向上が見られた。しかし、特に交流発表会では、「速度」の変化や「強弱」等がうまく表現しきれないところがあった。「強弱」・「音色」・「速度」等の音楽の諸要素を知覚・感受し、共演という形態や楽器の特徴をいかした表現等、聴く側の思いを考慮した豊かな表現の工夫をしようとする姿勢は十分にあったが、発表という場では緊張のため、身に付いた技能が十分に発揮できなかったと考えられる。本来、歌唱では発声・発音・呼吸法、器楽では奏法・呼吸法等の表現に意識を向け、ゆとりを持った演奏ができる技能を身に付けていかなければならぬ。この題材の前に、基礎的な技能を身に付ける題材設定が必要であると考えられる。

「速度」と「強弱」に関する工夫は音楽を表現する上で取り組みやすい内容である。全グループが「歌いやすくてゆっくり」「速度をあげて躍動感を」等、「速度」に関わる何らかの工夫をした。「強弱」においても、「強いはっきりした音」を意識し、すべてのグループが工夫して取り組んだ。曲想を意識した上で「強弱」の変化の工夫したのは1グループだった。楽曲の流れの中での「強弱」の工夫は、音楽表現をより深める。曲想を理解した上での表現は、音量の強・弱が伝わりにくくても、音の深みや厚み、膨らみや広がりには十分に伝わるからである。このような、表現を追求していくための指導の機会が必要であることを再認識した。

#### (5) 学習活動による指導効果の向上

「故郷」の手話を交えた歌唱は、歌詞の文語表現を理解する上で大変有効であった。多くの生徒が手話によって歌詞の意味を知り、理解し、楽曲全体を深く自分のものとすることができた（第3表）。利用者の身体訓練に役立ち、交流のきっかけとして取り入れる目的であったが、音楽の諸要素の知覚や感受と併せて、今後は意図的に取り組む価値を見いだすことができた。

#### 第3表 ワークシート（生徒の記述）より

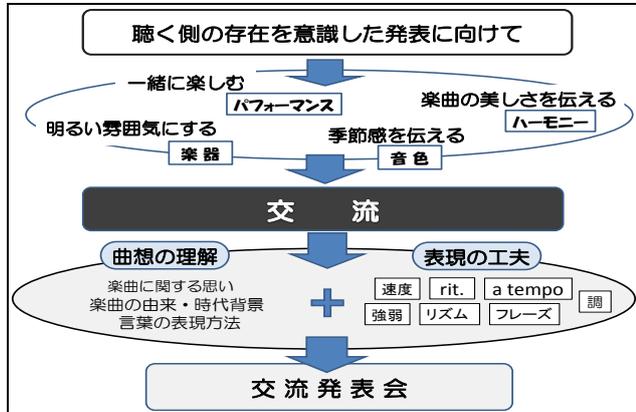
- ・歌詞を知って曲の想像の仕方が変わった
- ・何げなく歌っていたけど意味が分かっているような意味があるんだなと思いました
- ・意味が深く、一つ一つに意味があると思った
- ・意外と簡単にできたし、歌詞も覚えられた

## 6 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

はじめに各グループが聴く側との交流を通じて分析

し発想した表現方法には、いくつかの方向性が見られた。しかし、その表現方法が交流による利用者の反応や感想を得て、曲想の理解や音楽の諸要素という音楽科が目指す能力の育成に焦点化されていき、交流発表会で表現できたことは、この活動が筆者の目指した「主体的な活動」「豊かな表現力」につながるものであったと考えている（第5図）。



第5図 グループ活動の流れ

#### ア 主体的な活動の活発化

一つ目の成果として、聴く側を意識したグループ活動があげられる。生徒が自ら気付いて行動した一つ一つの小さなステップをグループで共有し、表現の工夫を発展させていくことに効果的に作用した。

二つ目は、そのグループ活動を充実させた言語活動である。ワークシートを使った言語活動に、抵抗感を持ち、とまどっていた生徒も多かったが、徐々に慣れていき、効果的な表現の工夫の具体的記述が増え、充実したものとなった。

この交流授業を通して、生徒が取り組みたくなる場面を作ることが、自然と言語活動を充実させる結果となり、さらに表現を高めようという主体的な活動の活発化につながった。

#### イ 音楽表現の工夫

聴く側との交流を通して、生徒は目的を明確に持ち、さらに曲想を理解し、表現の工夫を深めていった。5検証結果と考察で述べたように、音楽の諸要素を知覚・感受した上での表現の工夫は、音楽を表現していく過程を大切に、創造的な表現を伸ばす活動につながった。そして、この活動の成果を生徒自らが実感できたことにより、感性が高められ、さらに豊かなものにしていこうという意識が生まれた。

#### ウ 豊かな情操

「利用者が楽しみに待っている、そのためにこんな工夫をしよう、次回はあんな話をしよう」等、生徒は自然と聴く側を尊重し活動するようになった。この交流を通して、生徒は、楽曲を深く理解しただけでなく、利用者と共に曲想について考え、表現することによって、音楽に対する捉え方や考え方を深化させた。それは、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てることに

なり、豊かな情操を養うことにもつながったと考える。

#### (2) 今後の課題

本研究を通して、表現することを重視した題材に入る前に、基礎的な技能を身につけておくことの必要性を課題として認識した。この研究をより効果的な実践につなげるために、年間指導計画を立てた（第6図）。

	1学期	2学期	3学期
内容	歌唱 器楽	歌唱 器楽	歌唱 鑑賞
発表	ボディー パーカッション 箏	リコーダー ウクレレ 交流授業	合唱発表会
	基礎	応用	発展

第6図 「音楽I」年間指導計画

なお、本研究は、聴く側の存在が重要であり、本校が特色ある環境だからこそ実現できた。高齢化が進む今、本校のような環境が今後、増えていく可能性はあると思う。また、聴く側を近隣の保育園や幼稚園・小学校等と考えると、地域連携の視点からも十分に検討出来るのではないかと考える。その実現には学校や施設間の連携や協力体制についての検討が課題である。

#### おわりに

研究の成果でも述べたが、表現や鑑賞する上で音楽における言語活動は必要不可欠であると実感した。自分の考えを言語化するという習慣を持つことは、グループでの話し合い活動の活発化にもつながり、音楽表現を豊かにするための技能を身に付けることに大きな影響がある。音楽科においても限られた時間の中で言語活動をどのように効果的に取り入れ、身に付けさせていくかが大事である。

本研究の成果を踏まえ、今後も生徒の主体的な活動が引き出せる工夫を常に考え、音楽表現の能力を高め、豊かな情操を養う授業づくりを心掛けていきたい。

#### 引用文献

文部科学省 2008 『高等学校学習指導要領解説 芸術編』 教育出版 p. 11, p. 15  
 国立教育政策研究所 2011 『評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校芸術〔音楽〕】』 教育出版 p. 33

#### 参考文献

中村祐治・尾崎誠 2011 『「学力の3要素」を意識すれば授業が変わる!』 教育出版  
 山本敦子 2011 「高齢者を対象とした音楽療法の実践に関する一考察—プログラム例の分析を通して—」 (高田短期大学紀要第29号) pp. 141-152  
 野ばら社編集部 2007 『日本のうた 101 プラス6曲』 野ばら社